

introduction

骨折治療は整形外科医にとって最も日常的でありながら、最も奥深く、そして術者の哲学と経験が最も問われる領域の一つである。目の前の骨折を「治す」とは何か―それは単に転位した骨を整復し、インプラントで固定することではない。骨癒合という生物学的現象を理解し、その治癒環境を適切に設計し、最終的に患者の機能回復と社会復帰へ導くことである。そこには解剖学的整復、力学的安定性、生物学的環境の温存、軟部組織への配慮、患者背景の把握、さらには術後リハビリテーションまでを見据えた総合的な判断が求められる。

近年、インプラントや手術手技は著しく進歩し、プレート、髄内釘、創外固定、各種ワイヤリングなど、選択肢は大きく広がった。高齢者骨折の増加に伴い、骨粗鬆症を背景とした脆弱性骨折に対する治療戦略も大きく変化している。一方で、どれほど優れたインプラントを用いても、その特性を理解せずに使用すれば、期待した結果にはつながらない。道具が進歩し、選択肢が増えたからこそ重要になるのは、「なぜその方法を選ぶのか」を自ら説明できる基本原則の理解である。Absolute stability と Relative stability, 直接的骨癒合と間接的骨癒合、整復と固定のバランス、低侵襲と内固定強度の両立、そして早期離床を可能にする後療法までを含めた治療計画がなければ、良好な治療成績には到達できない。また、骨折治療は単なる“手術手技”ではなく、術前計画から始まり、術中の判断、術後管理に至るまで一連の思考の積み重ねで成立する。術前画像をどのように読み、どの骨片を鍵と考え、どの順序で整復し、どの固定方法でどこまで荷重を許可するのか―そのすべてに理由が必要である。経験豊富な術者ほど、無意識に行っている判断の背景には、確かな原理が存在している。

本特集“骨折手術の基本の「き」”では、骨癒合の基礎から始まり、術前計画、プレート&スクリューの機能理解、CCW (cerclage compression wiring) や K-wire の使い方、髄内釘、創外固定といった原則を整理したうえで、上腕骨近位部骨折、橈骨遠位端骨折、足関節骨折、大腿骨転子部骨折、大腿骨頸部骨折など、日常診療で頻繁に遭遇する代表的骨折を取り上げた。いずれも「特別な技術」ではなく、「基本を正しく行うこと」が治療成績を大きく左右する領域である。

若手医師には原理原則を理解する入口として、経験を積んだ術者には自身の治療を見直す再確認として、本特集号が明日の診療と手術に直結する、実践的で信頼できる1冊となれば幸いである。

福岡整形外科病院 院長
徳永真巳